

京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科
博士論文審査報告書

氏名	中村 千珠
学位の種類	博士 (心理)
学位記番号	甲 第 1 号
学位授与年月日	令和 2 年 9 月 24 日
学位論文名	がん患者への実存的グループ療法・プログラムの開発
博士論文審査委員会・委員	
	河瀬雅紀 (主査) (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科教授)
	向山泰代 (副査) (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科教授)
	伊藤一美 (副査) (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科教授)
	村松朋子 (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科准教授)
	尾崎仁美 (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科准教授)

1. 論文内容の要旨

中村千珠氏の博士論文は、がん患者が抱える実存的問題に焦点をあてた実存的グループ療法・プログラムを開発し、その有効性と応用可能性について考察している。一般に、がん患者は、がんの再発・進行の恐れから「生きている意味や目的に関わる問題や懸念」に由来する実存的苦痛を経験するといわれている。がん患者の実存的問題に焦点をあてた精神療法の評価は多くが海外で実施され、本邦での報告は限られている。そこで、本博士論文は、がん患者へのニーズ調査から実存的問題に焦点をあてたグループ療法プログラムを作成し、本邦のがん患者への適用を試みている。そして、実存的グループ療法・プログラムについて量的に分析を行うとともに質的分析も行うことにより有効性を考察している。

本論文は全 8 章から構成され、各章の概要は、次の通りである。

第 I 章は序論であり、本研究の目的や背景を記している。

第 II 章「がん患者が抱える心理社会的諸問題に対する現状認識および心理的サポートへのニーズの把握その 1 (研究 1)」では、海外においては終末期・終末期以外の病期にかかわらず、生きている意味や目的についての関心や懸念に由来する痛みに関わる問題に焦点をあてたがん患者へのグループ療法が有効であったことから、本邦においてもその可能性を探るために、日本におけるがん患者の心理社会的諸問題に対する現状認識と心理的サポートへのニーズに関する実態調査を行っている。日常行動の制限が比較的少ない Performance Status (以下、PS) が 0~2 の患者を対象にし、132 名(男性 35 名, 女性 97 名, 平均年齢 59.7 歳, 標準偏差 11.63、原発がん: 乳癌 71 名、消化器系 17 名、その他 28 名、不明 16 名) から回答を得、作成した質問紙を因子分析した結果、「現状認識」については ①受容②家族③社会的

資源④宗教・信仰⑤自立・協力⑥友人⑦平穩、「ニーズ」については ①病気・死の受容②自己価値③社会的資源④家族⑤宗教・信仰⑥自立・協力⑦忍耐のそれぞれ7因子を抽出している。「ニーズ」で抽出された“病気・死の受容”“自己価値”“宗教・信仰”“忍耐”の因子は生きている意味や目的についての関心や概念と関わっているスピリチュアル（世界保健機関，1993）に関するもので、そのなかに宗教的な因子も含まれた。そして、これらのなかでも実存的問題に関する“病気・死の受容”“自己価値”“忍耐”へのニーズが高いことが日本人においても確認され、これは本研究で得られた新たな知見である。そこで、本研究では、スピリチュアル（世界保健機関，1993）に関するものから宗教・信仰に関するものを除外した、生きている意味や目的についての関心や懸念（実存的問題）に由来する痛みを実存的苦痛と定義している。

第Ⅲ章「がん患者が抱える心理社会的問題に対する現状認識および心理的サポートへのニーズの把握その2（研究2）—ニーズと個人内要因との関連—」では、研究1で乳がん（女性）が多かったことを踏まえ、男女の総数で罹患数が最も多い消化器がん286名（男性186名、女性98名、不明2名）を対象にニーズ調査を実施している（PSが0～2、平均年齢66.3歳、平均罹患期間3.53年）。さらに、心理的サポートへのニーズや心理状態に影響を及ぼす要因を探るため、身体的問題、がんに対するコーピングスタイル（Mental Adjustment to Cancer；MAC）、性格特性（Big five尺度）などを取りあげ、その関連性を検討している。因子分析の結果、“生きる意味や価値への探求”“家族や医療スタッフとの関係改善”“受容”“補完療法への関心”“宗教・信仰”“周囲とのコミュニケーション”の6因子が抽出された。そして、“生きる意味や価値への探求”“受容”など実存的問題に対するニーズが高いことが認められ、また、“家族や医療スタッフとの関係改善”“周囲とのコミュニケーション”へのニーズも高いことが示された。すなわち、実存的問題に対するニーズは、終末期のがん患者だけでなく、比較的全身状態の良いがん患者においても認められることが、本研究で明らかになった。また、WHOの定義のスピリチュアルに含まれる“宗教・信仰”が独立した因子として抽出され、そのニーズが低かったことが日本人の特徴であることも本研究で明らかにした。本研究では、「前向き」「不安」「絶望感」「運命」「回避」の5側面から構成されるがんに対するコーピングスタイル（MAC）を用いてクラスタ分析を実施し、「奮闘群」「前向き安定群」「前向き不安群」の3群を見出している。このうち「奮闘群」はMACの「回避」「前向き」「不安」「運命」が高く、気分状態では「抑うつ」「活気」が有意に高い。すなわち、コーピングという点ではがんという事態への直面化を回避することで前向きに振舞っているが、「先の予定が立てにくい」「再発または悪化が気がかり」などの不安がみられ、そのため、気分状態では「活気」と「抑うつ」が高い矛盾した状態にあることから、コーピングとしての「回避」や「前向き」が困難になった時には精神的に不安定になる恐れがあると想定される。また、MACの「前向き」「不安」「運命」が高い「前向き不安群」では、気分状態の「緊張」、「抑うつ」、「疲労」や「混乱」が有意に高く、性格傾向では「情緒不安定性」が高く、「開放性」が低いことが示された。がん患者のコーピングスタイルをクラスタ分析

し性格特性と気分状態との関連が見いだされたのは本研究の新たな知見である。そして、この結果は、コーピングとしての「回避」が高い群や性格特性で「開放性」が低い群に対して、気分状態等を改善できるグループ療法のプログラムを作成する必要性を示している。

第IV章「がん診療連携拠点病院における心理社会的サポート—医師へのアンケート調査より—（研究3）」では、がん患者のグループ療法について、日本での実施可能性を探るために、がん診療連携拠点病院の医師(360名)からみたがん患者の心理的サポートの現状とニーズについて調査をしている。その結果、各種相談窓口や、情報提供のためのパンフレットなど、現状もある程度充足されており、その必要性の認識も高かった。一方、専門家によるグループ療法や患者同士が集まれるサロンなどは、現状ではあまり充足されていなかったが、その必要性は認識されていたことを示した。ただ、その必要性は各種相談窓口ほど高くなかったことから、医師に、患者のニーズやグループ療法の存在と有効性などを理解してもらうことが課題として見いだされた。

第V章「実存的グループ療法・プログラムにおける特殊性と応用可能性について（研究4）—腎患者が抱える心理社会的諸問題に対する現状認識および心理的サポートへのニーズの把握からの検討—」では、腎移植患者134名を対象に心理社会的諸問題に対する現状認識および心理的サポートへのニーズを把握するための質問紙調査を実施している。腎移植患者は、移植後に適応障害やうつ病などの精神障害がみられることが多数報告されている。すなわち、腎不全など生命の危機を招く恐れがある慢性疾患を患いながら、腎移植治療により透析治療から解放される側面がある一方、透析治療のなかでさまざまな支援が受けられる環境の喪失、拒絶反応や移植腎の機能低下などの不確定性に由来する不安、しかし再透析導入という選択肢があることなど、がん患者が置かれている状況と共通する点および異なる点がある。そして本研究では、腎移植患者への質問紙調査の結果を第II章・第III章のがん患者への調査結果と比較しながら、腎移植患者も実存的問題に関するニーズを有していること、腎移植患者とがん患者では「生きる意味や死や孤独」「家族との関係」については共通するテーマであること、腎移植患者では病気の受容のありかたや出来なくなっていくことへの思いに積極的な意味合いも含まれていた点でがん患者とは異なっていたことなどを明らかにしている。そこで、がん患者に対しては、特に喪失感や無価値感に対するアプローチが必要であることを考察している。また、がん患者に対する「実存的グループ療法・プログラム」の要素の一部は、腎移植など実存的ニーズを喚起する他の疾患の患者に対しても応用可能であることを示唆している。

第VI章「実存的グループ療法・プログラムの作成」では、第II章から第V章までの結果を踏まえ、実存的問題に焦点をあてた心理教育的アプローチを含む構造化モデルのプログラムを作成している。その特徴は、実存的問題に焦点をあてながら先行研究の多くとは異なり週1回5週間からなる短期のプログラムであること、心理教育およびリラクゼーションを含めた構造化グループでありながらも、感情の表出や自己開示そして他の参加者からのサポートや新たな視点・関心などの獲得が促進される自由度の高い話し合いを重視している点

である。第1回は、参加メンバーの自己紹介である。第2回の「がんに伴う不安について－不確実性に向き合えるようになるために」では、病気に伴う心の動きや心身の変化を知り、自分の気持ちや状態に気づき、これらの不安を安心して表出し、わかちあう大切さを学び、不安や絶望への介入を目的としている。第3回の「家族や友人とともに生きていくために」では、第Ⅲ章の調査でニーズが高かった“家族や医療スタッフとの関係改善”“周囲とのコミュニケーション”に関連して、家族や友人など周囲の人とのよりよい関係を築くためのコミュニケーションの改善を図る対処法の獲得を目的としている。第4回の「主体的に生きるために－不安への取り組み」では、第2回のテーマを引き継ぎ、不安や心配事に対処できるように、具体的に取り組み方を話し合う。すなわち、第3回のテーマを第2回と第4回の間導入することにより、自身を客観視し、改めて不安や心配事に取り組めるようにするものである。また、第2回・第3回を経ることによりグループの凝集性を高め、不安や心配事への開示や直面することへの安心感が得られるようにし、特に第Ⅲ章の「回避」が高い「奮闘群」への介入を試みるものでもある。第5回の「自分らしさを見直す－自分にとって大切なもの、支えとなるもの」では、第Ⅲ章の調査でニーズが高かった“生きる意味や価値への探求”“受容”を取りあげ、過去、現在、未来の軸で自分の中にある本質的なものに気づき、自己の一貫性を支え、自己回復を図ることを目的としている。

第Ⅶ章の「実存的グループ療法・プログラムの効果（研究5）」では、第Ⅵ章で作成した実存的グループ療法・プログラムを初発乳がん患者に実施した結果を考察している。がん患者の30～50%が適応障害やうつ病などの精神的障害を経験すると言われ、これらの精神的障害は、患者のQOLに影響を及ぼすだけではなく、自殺の要因ともなりうることで問題となっている。そして、がん患者の絶望感やうつ状態や希死念慮に影響を与えそれらを強める。本論文では、実存的グループ療法・プログラムにより、絶望感（MAC）が高い群で、スピリチュアルに関連するQOL（SELT-M「全体的QOL」）の改善がみられ、その効果が介入1カ月後でも持続することを示したことから、本プログラムは精神的健康の改善だけではなく、希死念慮を緩和することが期待される。また、本プログラムの完了率は高く（91.2%）、参加者のニーズに添ったプログラムであることが理解できる。それは、取り上げたテーマだけでなく、構造化グループでありながら自由度の高い話し合いを重視したプログラムであったためではないかと考えられる。この点は第Ⅲ章でみられた「前向き不安群」のように性格傾向で「情緒不安定性」が高く「開放性」が低い場合でも構造化されたグループ療法プログラムである点から安心して参加でき、一方、自由度の高い話し合いから視野も広がりさまざまな刺激が得られることも有効だった可能性がある。このように本プログラムは、多くのがん患者のニーズに添って、安全に実施されることが期待できる。本論文では、さらに文章完成法の手法を用いて、絶望感高群（MAC）においてスピリチュアルに関連するQOL（SELT-M「全体的QOL」）が改善する要因を分析している。多重コレスポンデンス分析を実施し、日々の生活を＜義務/ルーティン＞ではなく＜必要不可欠で大切な時間＞と捉えること、＜笑顔＞で過ごすといった自分でできる目標がQOLを改善する要因となることを見出している。そこで、＜義務/

ルーティン>から<必要不可欠で大切な時間>に変化し、<笑顔>で過ごすという目標を獲得するプロセスを捉えるため、事例から考察を行っている。そして参加者同士の語りから、実存的問題に向き合い、自分の抱えている問題が整理され、自分の価値や重要性を再認識し、自身および他者を受け入れ、新たな生き方・可能性・関係性を見出していく一連のプロセスを見出している。すなわち、自己の一貫性を確認し自己回復が図られ、日々を<必要不可欠で大切な時間>と捉えるようになり、<笑顔>で過ごすことが目標として受け入れられるようになったと考察している。

第Ⅷ章は、統括的考察および今後の展望を記している。

2. 論文審査結果の要旨

博士論文本審査委員会は、中村千珠氏が提出した学位論文が博士（心理）を授与するに値すると判定した。審査過程と審査結果の概要は以下の通りである。

2020年5月申請者が提出した学位論文を受け、2020年4月定例心理学研究科会議で承認された河瀬雅紀教授、向山泰代教授、伊藤一美教授、村松朋子准教授、尾崎仁美准教授から構成する博士論文本審査委員会が設置され、2020年6月定例心理学研究科会議において、本審査委員会より博士論文提出の要件について、要件を満たすことが確認されたとの報告がなされた。本審査委員会は提出された学位論文の内容について審査するとともに、2020年6月18日最終試験を実施し、試験終了後、本審査委員会が開催され、委員全員が「合」すなわち学位論文の審査基準を満たしていると評価した。2020年7月1日定例心理学研究科会議において、最終試験の結果、審査委員会として、本論文は博士論文として優れた内容を持ち、その研究成果は当該領域において重要な価値を有していることなどから、本論文審査委員会は本論文が博士（心理）の学位を授与するに値すると判断したことが報告された。公聴会は2020年8月5日に実施された。2020年9月2日定例心理学研究科会議において、提出された学位論文について、論文内容の要旨、論文審査結果の要旨、修得単位について説明があり、博士の学位の授与の議決が行われ、博士後期課程修了（博士の学位授与）が承認された。

本学位論文は、次の点で高く評価できる。

第一に、本論文は心理学研究科が定める学位論文（博士論文）審査基準を満たし、がん患者の心理社会的問題をテーマにした臨床心理学の学位論文（博士論文）として高いレベルに達している。すでに、第Ⅱ章の研究は、日本における心身医学領域の主要学術雑誌である心身医学に論文（査読付き）が掲載されている。第Ⅳ章の研究は、高度医療や末期医療におけるメンタルケアをはじめ、医療の場での精神的問題を専門的に扱う総合病院精神医学雑誌に論文（査読付き）が掲載されている。

第二に、基礎的な調査研究から応用的な臨床的研究に至る展開も論理的で、目的の達成に向けて緻密にそして着実に研究を積み重ねている点からも研究者としての高い能力を示している。

第三に、第Ⅱ章および第Ⅲ章でスピリチュアルに関するニーズのうち日本人においては「宗教・信仰」とは別に実存的問題に関する因子が抽出されたこと、第Ⅲ章でがん患者のコピーングスタイルをクラスタ分析し性格特性と気分状態との関連を見出したこと、第Ⅴ章で腎移植患者との比較からがん患者特有の心理社会的諸問題に関するニーズを明らかにしたこと、第Ⅶ章では実存的グループ療法・プログラムにより特に絶望感が高い群についてスピリチュアルに関連するQOLの改善を確認し、さらに、そのプロセスについても明らかにしたことなど、新たな知見が得られ、本論文は、がん患者が抱える実存的苦痛の緩和という困難かつ重要な課題に取り組んだ研究であり、その解決に向けて大きく貢献するものであると考えられる。